

博士學位論文要約

Summary of Doctoral dissertation

論文題目： 風景に刻まれた「基地の街」コザをみる

Title of Doctoral Dissertation
—子どもたちの作文からひろがる沖縄戦後史—

氏名： 木谷 彰宏
Name

要約：
Summary

本論文は、「誰が何をどう書けば沖縄の戦後の歴史を叙述したことになるのか」という問いを起点として、沖縄の戦後の歴史を象徴する「基地の街」コザと、そこに生きる人びとの姿の一端を、初等中等教育期の子どもたちが書いた作文を検討することを通して叙述したものである。

これまで、沖縄戦後史をめぐる研究では、「基地の島」として支配するアメリカ統治と、それに抵抗する復帰運動史に代表されるような社会運動史という枠組みが、既定の枠組みの一つとして、暗黙の前提のように厳然と存在してきた。それら研究においては、様々な歴史史料や回顧録、聞きとりなどの中から、上述したような枠組みを実証するものが歴史を語る言葉として扱われ、その枠組みにそぐわないものは、結果として歴史を語る言葉としてみなされてはこなかった。

沖縄の戦後において作文や作文教育を扱ってきた研究もその例外ではなく、沖縄教職員会の「『日本人』意識の育成」の教育を批判する形で取りあげられ、「国民教育運動」の成果を示すものとして読まれてきた。子どもたちの作文はあくまで、「国民教育運動」史の一環として、自らの論を例証する材料として扱われ、結果的に上記の枠組みを強固にしてきた。同時にそれらの研究では、子どもたちの作文を、歴史を語る言葉としてはみなしてこなかったといえる。

本論文では、米軍占領下の沖縄の歴史を象徴するような街ともいえるコザの街に注目した。コザの街に注目したのは、コザが「基地に隣接し、戦後、基地から派生するエネルギーを吸収しながら個性的な文化を育み、形成されていったと思われる街」だからである。コザに隣接する嘉手納基地は、米国の世界戦略の中で、恒久基地化が進み、主権的境界を越えて展開する、横断的支配の結節点として機能し、コザに暮らす人びとは常に戦争と背中合わせで生きてきたといえる。

コザの街については、これまで地理学的な観点からなされた研究があるが、これらの研究においては、コザの街に生きた人びとの姿が必ずしも明らかになったとは言い難い。

そこで、本論文では、コザの街に生きていた人びとをまなざし、そこに生きる人びとの姿から、「基地の街」と呼ばれたコザの街について叙述していった。コザに生きた一人ひとりの経験それ自体は、小さな物語かもしれないが、私的な記録や記憶は、これまでの研究や公文書などの記録の網の目からこぼれ落ちて見えなかったものを、光で照らし、見えるようになし得るのではないか。人びとが生きる場所としてのコザの風景に目を凝らし、そこに刻まれた記憶や経験にはりついているつぶやきに耳をそばだてながら、「基地の街」と呼ばれたコザに生きた人びとが歩んだ歴史の叙述をめざした。

序章では、沖縄戦とそれに続く占領下における、人びとの〈生〉について、食糧配給と衛生政策の点から考察した。そこでみえてきたのは、占領下における沖縄の人びとは、ジュディス・バトラーのいう「不安定性」の中、つまり、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きていたということだった。占領下の“復興”に寄与するとみなされた者は、「あやうく、嘆きうる存在」として政治的に承認され生きていくことができたが、そうではないとみなされた者は「使い捨ててもよい」とされ、救済も受けられず、取り残され、時には死に至ることもあった。その点においては、米軍による沖縄の占領統治は、アシル・ムベンベのいうネクロパワー（死なせしめる権力）による政治＝ネクロポリティクスであったといえる。ネクロポリティクスのもとでは、多くの人が、「生ける屍＝(living dead)」とされる〈生〉の状態に置かれることになった。このように、沖縄戦とそれに続く占領下においては、「不安定性」の中にある〈生〉の格差が存在したのである。

上記のことを踏まえ、歴史を語る言葉について、バトラーの「予めの排除」に依拠しつつ、考察した。バトラーによると、人は、「発話可能性を取りしきっている規範」を身体化することで、発話主体とみなされるが、発話の可能性が危険に晒されていると主体が感知するとき「予めの排除」があるという。バトラーは、この「予めの排除」によって発話領域が定められ、その境界線を「切断線」と呼んだ。このことをネクロポリティクスのもとで生きる人びとに当てはめると、「使い捨ててもよい」とみなされた生は、発話主体とみなされず、発話可能性の領域外にいるとみなされてしまう。つまり、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きている子どもは発話主体とみなされず、語ろうとする言葉は歴史を語る言葉とはみなされないことになる。このように考えたとき、発話可能性の領域外にいる人びと、言い換えれば、「切断線」の「まえ」にいる人びとの生きている姿を、何によって感知し、どのように叙述できるのか、という問いが生まれた。バトラーは、このような「切断線」の「まえ」にいる人びとを感知するには、想像することが必要だと指摘した。

そこで本論文では、子どもたちの作文もまた歴史を語る史資料となりうるのではないかと考え、発話領域可能性の外にあるとみなされていた子どもたちの作文を「切断線」の内に取り戻し、その言葉から風景を想起することで、「基地の街」コザで「不安定性」の中に生きる人びとの〈生〉の姿を明らかにすることをめざした。

具体的には、子どもと、子どもたちの作文を次のように考えていった。まず、子どもを発話主体と捉え、子どもたちが綴った作文を「切断線」の内に取り戻した。しかしながら、それだけではまだ十分ではない。なぜなら、学校教育の規範の中で書かれる子どもたちの作文にも、すでに「予めの排除」が働いているからだ。しかも、これまで研究の枠組みで用いられてきた語彙で語るなら、結果として、歴史を語る言葉とみなしたことにはならないからである。そうであるならば、バトラーのいう「切断線」の「まえ」を想像するプロセスが作文を読み解くときに必要となる。そこで、子どもたちが作文を書くときに感じたこと、思い浮かべたことを風景として想起し、「予めの排除」によって引かれた「切断線」の「まえ」の風景の中の「不安定性」の中に生きる人びとの生の姿を明らかにしていくことをめざした。

第1章では、ネクロポリティクスのもとで、「予めの排除」によって引かれた発話領域の「切断線」の「まえ」の風景を想像するために、〈風景〉という視座を導入した。眼前にある風景や風景を描いたものから、いかなる方法によって、過去にあった歴史の風景や心象風景を見いだすことができるのか。そのことをこれまでの歴史叙述としての風景論から検討した。

それらの風景論に共通するのは、実体としては存在しない風景を、認識の上でははっきりと知覚したことである。そして、歴史上のある風景を知覚するために必要であったのは

想像力だった。ただ、この想像力には、探究すべき何かがあるという探究の〈構え〉と、日常感覚を起点とする「過去へのまなざし」が触媒として必要であった。

これらのことから、「切断線」の外にいる人びとを風景の中に見いだすために、風景の中（内側）に入り込むこと、そして、その人びとの身体を〈まなざし〉、動的に捉えた風景の中で、その声を聴きとることが叙述の起点となることがわかった。

第2章では、自ら語ったり、記録を残したりしていない人びとの声や姿をどのようにすれば把握できるのか、作文から「切断線」の前の風景をどうすれば捉えられるのか。それらのためには、作文のどこに着目すればよいのかを検討した。

まず、どのようにすれば作文から風景を析出できるのかを考察した。1950年代の沖縄の子どもを取り巻く言語状況や、沖縄における作文教育の展開を概観したのち、子どもたちの作文を読むための視点を、エゴ・ドキュメント研究から検討した。エゴ・ドキュメントが生成される場面に注目すると、その生成の動機、書き手を取り巻く関係性、生成に至った書き手の経験や感情などをうかがうことがわかった。また、エゴ・ドキュメントには他者の身体や声など、書き手の五感によって知覚された世界が描かれており、そこから動きのある風景を捉えうることもわかった。

このように、作文が生成されるプロセスと作文が描き出す世界の中に、「語りの複合性と重層性」があり、それを沖縄の子どもたちが書いた作文の中に見いだすとき、ネクロポリティックスのもとで社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きている人びとの姿をも、風景の内に析出することが可能となることもわかった。そのためには、生成のプロセスも含めて、エゴ・ドキュメントが描き出す風景に目を凝らすことが必要である。

第3章では、作文が書かれる以前の書き手を取り巻く状況に目を凝らすとき、作文の表象の世界はどう変わって見えるかに着目して、沖縄の戦後において「国民教育」が進められている頃の作文を読み解いた。

それらの作文からは、作文を書く以前の書き手の経験による風景に、書き手の想像上の風景、自らの実体験による風景が加わり、重層的な風景がみえてきた。作文から風景を析出するとき、そこには様々な風景があり、その風景の中には書く以前の書き手の経験に加えて、書き手の身体や書き手以外の〈多声〉が含まれていることがわかった。

第4章では、作文が生成される教室に着目し、〈教室の風景〉として教室の中で紡がれる関係性について考察した。教員と子どもたちが豊かな関係性を築いている教室もあれば、沈黙と空白が長く重苦しい教室もあった。教室の中で様々な関係性がみられ、会話が活発になる場合は、「予めの排除」が強く働く余地は少なく、発話可能な領域がひろがった一方、関係性が希薄で会話が続かない場合には、「予めの排除」が強く働き、発話可能な領域が狭くなっていった。子どもたちが書く必要性を感じる場所に誘うために、子どもたちとの間に信頼関係を築き、褒めること、話すこと、そして作文をしっかりと読んで、それに応答することに注力した教員の様々な工夫は、子どもたちの発話可能な領域を押しひろげ、「切断線」を「まえ」に動かした取り組みだといえる。

第5章では、それまでの叙述を踏まえ、作文から1950年代のコザの街の風景とそこに生きる人びとの姿をみていった。

戦前は純農村地帯であったが、沖縄戦とそれに続く占領によって、村の多くの土地が軍用地となったコザの街にとって、街が生き残るためには商業都市への転換を図るほかなかった。土に生きていた農民が生きていくために土地を放棄せざるを得ない矛盾の中で、生活のためには別の道を選ばざるをえなくなったのだ。

当時の村長は、基地に隣接する地域を米軍人・軍属と住民が交流できる場にするために

商業地域を建設し、街を商業都市にする構想（ビジネスセンター構想）をもっていた。ただ、住民の居住地域は不衛生で、「買春」もあると米軍から指摘されており、米軍の規制によって、建物の新築や増改築もできないとされていた場所でもあった。そこで、村長は街の環境浄化運動を始め、「売春」に関わる女性を住民の居住地域から一掃しようとした。この動きはやがて、このような女性を一定地域に集め生活空間から隔離することにつながっていった。

商業都市の実現には、米軍に接收されている土地の解放が必要であった。ビジネスセンター構想が認められると、商業施設建設のために順次土地が解放されていった。この土地解放の動きは沖縄各地で「土地収用令」に基づく「銃剣とブルドーザー」と呼ばれる土地の強制収用とは逆の動きであった。商業施設の建設は米軍にとっても必要だったのだ。やがてコザの街に米軍人・軍属向けの娯楽施設や商業施設が建設されていき、コザは「基地の街」となっていったのである。

だが、新しくつくられた娯楽施設や商業施設の傍らでは、戦場で使われる兵器や戦場に赴く兵士が運ばれる、死を予感させる風景があり、米国内の人種差別が越境して繰り広げられる風景があった。さらに、コザの街の女性が米軍人・軍属からの「性暴力」を受け、生命の危機を日々感じる風景もみられた。

子どもたちの作文には、基地から放出されるエネルギーを求めて集まってくる人びとが書き込まれていた。コザにある商業施設や娯楽施設は、ドルを獲得できる場となり、そのドルが街に“繁栄”をもたらしたが、その“繁栄”はネオンの光が一瞬のうちに消えるような儚いものであった。また、人と人との関係もすぐに消えてしまうような儚さがあった。その意味では、一時的な関係性が支配する、刹那的な空気を漂わせる風景のある街であった。

それだけではない。子どもたちの作文には、コザの街の片隅で、風景の中から不可視化されていった人びとが捉えられていた。それは「売春」に関わっていた女性たち、「非行少年」と名指された子どもたちの姿であった。彼女／彼らは、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きる人びとでもあった。

沖縄戦で配偶者を失った女性は多かった。成人女性の約14%が配偶者を失くしており、被救済世帯の中で救済を受ける寡婦女性はおよそ30%を占めていた。ただ、扶養家族が3人以上になると、それだけでは育てられず、経済的に厳しい状況に置かれた女性が多かった。生きていくために歓楽街で働く女性もいたが、そのような女性に対する社会のまなざしは厳しく、社会から疎外し、隔離し、排除しようとするまなざしがなくなることはなかった。このような女性の存在は、子どもの教育上好ましくないとして、女性たちを他者化し、人びとの生活空間から切り離し、囲い込み、忌避しようとして、歓楽街がつくられた。子どもを「悪環境」から守ろうとするこのような運動は全国的にも展開され、沖縄でも「子どもを守る会」が組織され、基地環境から子どもを守る運動が展開された。

また、子どもたちの作文には歓楽街で働く女性だけでなく、同年代の子どもの姿も書き込まれていた。歓楽街にやって来た米軍人・軍属や、そこで働く女性たちに対し、ガム売りや靴磨きをしている子どもたちの姿があった。当時の大人たちからみれば、このような子どもは学校にも行かず、「非行に走った」子どもであるということになるが、作文を書いた子どものまなざしは、そのような子どもたちが学校に行かない（行けない）現実に向けられていた。それは、作文を書いた子どもが、学校に行かない（行けない）子どもたちの背景に貧困があると気づいた瞬間でもあった。生きていくための糧を得るのに、他の家庭で子守りとして働いたり、街で靴磨きやガムや花を売ったりする子ども、そのために学校を長期間欠席する子どももいた。このように、コザの街に生きる子どもたちは、「不安定性」

の中に生きていたのだ。

子どもたちが置かれていた上記のような状況に対し、子どもの教育に関わる人びとのまなざしは、あくまで当時学校に通っている子どもたち、これから学校に通うであろう子どもたちに向けられていた。「子どもを守る会」は、そのような子どもを守るため悪い環境を「浄化」しようとした。その一方で、「非行に走った」子どもは、更生のための教育を受ける機会を与えられるというよりは、社会から忌避されていた。つまり、子どもたちの中にも〈生〉の格差が生じていたのだ。かたやあやういとみなされ、守られるべき存在であるとされた子どもと、失われてもよい、使い捨て可能な存在としての子どもである。「非行少年」と名指された子どもたちは、社会から「見捨てられた」存在であったのだ。歓楽街で働く女性たちと同様、バトラーの言葉を用いるなら、「切断線」の「まえ」におかれ、発話主体として承認されていないような存在でもあった。

「売春」に関わっていた女性たち、「非行少年」と名指された子どもたちは、喪失が嘆かれるものでなく、価値あるものでないとみなされ、都市化の波から取り残された人びとでもあった。さらに、彼女／彼らの行為が、社会的な規範から「外れている」とみなされたがゆえに、発話主体としても承認されず、「切断線」の「まえ」にいた人びとでもあった。街に〈生〉の格差が生まれ、分断が生じていただけでなく、社会から疎外され、隔離され、排除しようとするまなざしにも晒されていたが、それでも彼女／彼らは生きようとした。子どもたちの働くという行為、女性たちの「売春」という行為は、生存のため、「基地の街」で生き抜くための“選択”から生まれたものであった。この生存戦略を使うこと—ネクロポリティックスに抗う行為—によってのみ、彼女／彼らの生存は可能であったのだ。

以上、本論文は、「切断線」をめぐる攻防を叙述してきたともいえる。第4章で論じた〈教室の風景〉がその一例である。子どもたちが自らの考えを表明できるようにしたいと願う教員と、それに抗う子ども、「切断線」の内側に入れようとする教員、「切断線」の内に入れない子ども、「切断線」をめぐる教員と子どもたちのさまざまな関係性が、教室の中でみられた。子どもたちが「切断線」に入りやすいよう、「切断線」を「まえ」に動かした教員がいた。あえて沈黙を守ることで、「切断線」の内側に止まろうとした子どももいた。「切断線」によって〈教室の風景〉をも説明できるのであった。

「切断線」を巡る攻防は、第5章で論じた、コザの街の風景でもみられた。「基地の街」となっていったコザには、歓楽街で働く女性だけでなく、学校に行かずに物を売る子どもたち、「非行少年」と名指された長欠児、「アルバイト少年」などがいた。彼女／彼らは、社会的・経済的条件の中で不安定な存在として生きていた。しかし、彼女／彼らの姿は、生活環境の「悪化」を象徴するものだと捉えられ、「使い捨ててもよい」生だと不可視化され、彼女ら／彼らがいる風景は「浄化」の対象となっていった。彼女／彼らは、社会的な救済を十分に受けることなく、置き去りにされていった。コザの街に生きる人びとの〈生〉に格差が生じ、「切断線」が引かれていったのだ。

この「切断線」を動かそうとしたのは、島マスであった。島は、社会から疎外され、十分な救済が受けられない女性たちのために、米軍と交渉し、救済枠の拡大を実現させただけでなく、社会的な居場所を失った子どもを自ら引き取り、社会的存在として生きていけるようにと、行政の支援がない中、ボランティアな活動（児童保護所や女子ホームの設立）を行い、社会福祉に関する法整備や制度の実現につなげていった。これまで保護される対象とみなされなかった「非行少年」も福祉の枠組みの中では、その存在が承認されていくことになった。その意味で、島の行動は「切断線」を「まえ」に動かしたのだ。

このように、「切断線」という切り口で人びとの関係性や社会をみていくとき、様々な事象がこれまでとは違った形で浮かび上がってきた。その意味では、「切断線」は、これまでの歴史叙述からこぼれ落ちてきたもの、それをまなざすことを可能にする考え方のひとつ

課程博士・論文博士共通

For Ph.D. (by completing the Doctoral Degree Program) and Doctoral Degree (by submitting the Doctoral Dissertation)

であるといえる。沖縄戦とそれに続く占領下に生きた人びと、ムベンベのいうネクロポリティックスのもとで生きる人びと、バトラーのいう「不安定性」の中にある人びと、そういった人びとが生きた時代の歴史を叙述することを考えたとき、発話主体と、そうでないとみなされた人の境界線であり、〈生〉の格差の境界線でもある「切断線」からみた歴史叙述は、沖縄の戦後史研究の新たな地平を切り拓いていくものになり得るのではないか。そしてそこでは、子どもたちの書いた作文がそれを解き明かしていくための貴重な史資料となるのではないだろうか。